

THE FUTURE IS ART

Tokyo Tokyo FESTIVAL
Monthly Guide

文化でつながる。未来とつながる。

THE FUTURE IS ART

Tokyo Tokyo

FESTIVAL

文化でつながる。 未来とつながる。

東京はアートのかを信じている。

それは私たちのこれからを描く力だ。
それは違いを受け止め、通じ合おうとする力だ。

2020年。
東京はその力を世界に示したいと思う。

伝統と現代が、
そして世界中の文化が交差する
東京だからできること。

Tokyo Tokyo FESTIVAL
それは、アートでつながる
未来とつながる文化の祭典。

2019年3月発表

Tokyo Tokyo FESTIVAL から未来へ

世界中で猛威を振るう新型コロナは、社会に大きな打撃を与え、芸術文化もその影響を受けています。

2020年に向けて進めてきた Tokyo Tokyo FESTIVAL も、スペシャル13をはじめ多くのプログラムが延期や中止を余儀なくされました。しかし、アーティストをはじめ文化を取り巻く人々は、こうした状況と向き合い、芸術活動の再開、継続に向け、果敢なチャレンジを続けています。

新しい行動様式が浸透し、芸術文化の意義や役割が問い直される中、これまでにない表現や作品も生まれようとしています。芸術文化には、人々をつなぎ、閉塞感に満ちた社会を回復させる力、活力をもたらす力があるはずです。

東京はアートのかを信じ、Tokyo Tokyo FESTIVAL を通じて、未来を描いていきます。

2021年5月発表



THE FUTURE IS ART

Monthly Guide

Monthly Guideでは、毎月注目のプログラムを紹介。
編集チームがピックアップした各プログラムの魅力を、
インタビューや取材レポートなど多彩な内容で
2021年5月から9月までお届けしました。

※ここで紹介しているプログラム内容は、記事掲載時点のものです。

目次

Monthly Guide **5月号** 03

Monthly Guide **6月号** 05

Monthly Guide **7月号** 08

Monthly Guide **8月号** 15

Monthly Guide **9月号** 21

編集ライターチーム紹介



OKAJIMA

映画とテクノロジーが好き。自転車で東京中を移動。走行中にフツと感じる生活風景が好きですね。夕ご飯の匂いとか。



KATO

映画などエンタメ全般、伝統工芸、ものづくりの現場が好き。直感を大切に思う今日この頃。猫も好きで目が合うと寄ってきます。



HIGASHI

現代美術と映画、音楽が好き。最近、伝統芸能も気になってます。おいしいものとスポーツ観戦にも目がありません。

TOKYO Tokyo FESTIVAL スペシャル13 「TOKYO REAL UNDERGROUND」

2021年4～8月、銀座・新橋エリアとオンラインを中心に開催される「TOKYO REAL UNDERGROUND」は、アンダーグラウンドという言葉、実際の地下空間と、いわゆるアングラの「自由な精神」という2つの意味に解釈して開催されるダンスフェスティバルです。

舞踏 (BUTOH) の、過去・現在・未来を一望できる話題のイベントについて、アーティストック・ディレクターの川口隆夫さん (パフォーマー)、プロデューサーの溝端俊夫さん (NPO法人ダンスアーカイヴ構想 理事長) にお話を伺いました。



アーティストック・ディレクター：川口隆夫さん



プロデューサー：溝端俊夫さん

今、再び注目される舞踏 (BUTOH) の魅力

1960年代、日本で生まれ世界に広まった「舞踏」。川口さんはコンテンポラリーダンスの世界で活躍し、近年は舞踏の創始者の1人である大野一雄氏のパフォーマンスを再演されています。

「ダンスという美しい形の動きや振りがあるイメージだと思いますが、舞踏は、より内面的な、体の中でどんなことが起こっているかが、メインの動きの動機としてあると思います。

僕が『大野一雄について』という舞踏の作品を演じる中で感じるのは、芸術、アートの最先端を引っ張っていくような潜在力。現代的なアートの1つの形態として、全身を真っ白に塗ったり、非常に顔をゆがめて体をねじったり、普通の身体ではない形を見せるなど、とてもアバンギャルドな部分を担っている。

60年代から80年代初頭くらいまで、いわゆるアンダーグラウンドで大きな波を形成した舞踏が、最近、特にコンテンポラリーダンスの文脈の中で世界的に見直されているのは、すごく面白い状況だと思います」

見どころ

今回はコロナ時代のダンスフェスティバルとして、銀座の地下通路での展示、無観客上演のオンライン配信、リアルとオンラインをミックスさせたAR作品などを通して開催されます。川口さんが語る見どころとは――。

「いろんな映像や画像がインターネットを通じて氾濫していく中で、とてもささやかな微細な部分、外側にはあまり見えないけれど体の中に生成しているエネルギーみたいなものをじっと見つめる――これは、現代社会の中で非常に意味のあることだと思います。

昔は『パフォーマーの飛び散る汗を浴びながら観劇するのが、生の舞台の醍醐味』と言われました。

今、コロナ禍においてそれは難しいので、映像配信などテクノロジーで補うわけですが、カメラは本当に至近距離で、パフォーマーを数センチの距離で捉えます。

くらいつような別のアングルからの接近も可能で、普通の観劇とは一味違った面白さを味わえると思います」

(K)

プログラム

コロナ時代だからこそこの、これまでにない鑑賞が楽しめる本企画。どれもパフォーマーの熱いエネルギーを感じることができるプログラムです。

公式サイト <http://www.tokyorealunderground.net/>

TRU エキシビジョン



**ウィリアム・クライン写真展
「GINZA 1961 街が主役の写真展」**

日程：2021年4月1日(木)～7月13日(火)
※会期が延長になりました。
会場：銀座地下歩道 (銀座駅・東銀座駅間地下通路)
1961年に初来日した写真家ウィリアム・クラインの写真(10枚)が、60年の時を越えて出現する都市型の写真展。



**街歩き型 AR
「ダンス・ハプニング・トゥデイ」**

日程：2021年4月1日(木)～8月15日(日)
会場：銀座・新橋路上およびオンライン
舞踏の創始者とされる土方巽、大野一雄、大野慶人。1961年に彼らを撮影した写真など約350点が、地図に示された場所でスマホをかざすとスライドショーで鑑賞できる。新感覚の街歩き型 AR 作品。



オンライン年表「舞踏出来事ロジ」

日程：2021年4月1日(木)～8月15日(日)
会場：オンライン
イラストとともに振り返る舞踏の歴史。

TRUオンライン：パフォーマンス + アーティストトーク



撮影：Takuya Matsumi

川口隆夫『大野一雄について』他

日程：2021年4月24日(土)～8月15日(日)
※6月末まで、毎週末に新規プログラムを公開。
会場：オンライン
世界を飛び回る人気アーティストたちの新作、話題作を無観客上演・撮影し、オンライン配信。また、パフォーマンスや展示に関するトークも配信中。

Q

アートを通して伝えたいこと、実現させたいこと

アーティスト・ディレクター：川口隆夫さん

アートで何ができるのか。世界が様変わりした中で、いろんなことを模索しながら進んでいきたい。非常に些細な現実を、今までになかった大胆な切り口で見せられた時に、思いもなかった感情や考え方、驚きが生まれる。それがすごく大切で、僕はそれを必要としている。それが、アートかなと思います。

プロデューサー：溝端俊夫さん

舞踏は今、新しい時代を迎えている。コロナという時代の中で社会の土台が変わり、新しさという言葉では表現できないような激しい変化の中で、今回オンラインでも開催します。コロナ禍で改めて認識したのは、やはり、人と人とのつながりが一番大事なんだということ。そのことをアートを通して皆さんにお伝えしたい、というのが私の思いです。

REPORT

Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13 「TOKYO REAL UNDERGROUND」

巨大ポスターの迫りに圧倒されるウィリアム・クライン写真展 「GINZA 1961 街が主役の写真展」

4月1日から開催されている「TOKYO REAL UNDERGROUND」。よく晴れた某日、地下鉄銀座駅を降り、三越入口の横を通り地下道へと向かう。(取材日：2021年4月20日)

「舞踏 (BUTOH)」と聞いて思い浮かべるのは、髪を剃り、白塗りで踊る舞踏家たちの姿。ちなみに、私はこの世界の知識が全くない。そのまま歩いていくと、巨大なポスターを発見!モノクロの写真に鮮やかな赤のコントラストが映える。

まず、その姿に圧倒される。モノクロの写真のせい、パフォーマーの何とも言えないエネルギーを感じる。その背景に写っている情景もまた興味深い。当時の看板や、突然、銀座の街で繰り広げられたパフォーマンスを見ている60年前の市井の人たちの表情も面白く、思わず見入ってしまう。

60年前のパフォーマンスとリンクする、街歩き型AR「ダンス・ハプニング・トゥデイ」

次に、事前にお気に入り登録していた「TOKYO REAL UNDERGROUND」のサイトから「AR体験をはじめ」をタップ。すると、銀座界隈の地図が現れた。しかし!こんなことをしなくても、展示にちゃんとQRコードが表示されているではないか! 知らなかった……。

番号の場所に歩き出し、スマホをかざすと、1961年に撮影された写真のスライドショーが始まる。雨上りの銀座・新橋街頭で、舞踏の創始者とされる土方巽氏、大野一雄氏、大野慶人氏らのパフォーマンスを撮影したのは、写真家のウィリアム・クライン氏。

まだ人生で数回しか経験していないAR。ワクワクしながらいろんな操作を試し、スマホをかかげたまま「わー!これ三越!?!」とか言いながら銀座の街を歩く。

三越といっても、スライドショーに写っている当時の三越らしき建物に感動しているわけだが、周りからは今の銀座の街に感動しているように見えるわけ。おのぼりさん(死語?)っばいけど気にしない(笑)。他にも銀座の地下道や新橋付近など、スライドショーを鑑賞できる地点は数カ所ある。

※つい夢中になってしまいますが、スマホに気を取られて歩行者にぶつからないよう、行かれる方はくれぐれもご注意を。現地に行かなくてもオンラインでも見ることができます。

これまで舞踏の世界を覗いたことがなくても、その歴史に触れたり、AR体験で楽しめる「TOKYO REAL UNDERGROUND」。上記の他にもオンライン年表や、人気アーティストのオンライン公演など多彩なプログラムを展開中!もっと大々的に宣伝してもいいのでは?と思うが、そこはアングラならではのさりげなさ、というところなのかもしれない。(K)



東京で16年ぶりに上演される超大作を“体感”できる貴重な機会 ワーグナー作曲『ニュルンベルクのマイスタージンガー』



©OFS/Monika Rittershaus 2019年4月ザルツブルク・イースター音楽祭公演より
本公演は、東京文化会館と新国立劇場、ザルツブルク・イースター音楽祭、ザクセン州立歌劇場の国際共同制作で、ザルツブルクとドレスデンで上演した後、東京での上演は2020年に予定されていたが、新型コロナウイルス感染症の影響で中止となり、この度、待望の上演となります。

2021年8月、オリンピック・パラリンピックの文化オリンピック公認プログラムとして『ニュルンベルクのマイスタージンガー』が、東京文化会館にて上演されます。

また、今秋には、新国立劇場においても上演が予定されており、ますます注目が高まっています。そこで、世界的に人気の高い超大作の見所を、制作担当の東京文化会館 事業企画課・佐藤さやかさんに伺いました。
(取材日：2021年4月28日)



東京文化会館 事業企画課
佐藤さやかさん

ワーグナー作品では希少な喜劇を 今まさに円熟期を迎えた 大野和士と東京都交響楽団の共演で。

この『ニュルンベルクのマイスタージンガー』の見所は、あげればキリがないのですが、まず東京での上演は16年ぶりとなります。もう、それだけでも観る価値がありますよね。しかも海外のトップレベルの歌手たちが来日し、日本の実力派の歌手も勢揃いします。そして、オーケストラは東京文化会館をホームグラウンドとする都響(東京都交響楽団)で、指揮は世界的なマエストロ・大野和士です。この共演は、まさに円熟期を迎えており、「今」しか出せない響きを創り出すことでしょう。また、ワーグナー唯一の喜劇ともいわれている演目でもあり、コミカルで理解しやすいところも魅力です。



総合プロデューズ / 指揮
大野和士



©Ludwig Olah
演出 イェンス＝ダニエル・ヘルツォーク



©OFS/Monika Rittershaus 2019年4月ザルツブルク・イースター音楽祭公演より

「芸術と民は共に育ち、咲き誇らん」という 名台詞が今の時代、特に響くのでは……。

オペラというと王族や貴族の話が多いイメージがありますが、この演目の主役は市井の人。そして「芸術と民は共に育ち、咲き誇らん」という名台詞もあり、町の人々が芸術を守り、高めようとしていきます。芸術を守るというテーマは、時代や社会状況を超えて現代にも通じるものでし、コロナ禍にある今、より強く深く響くのではないのでしょうか。演出の手法も時代設定を移す、いわゆる“読み替え”が使われていますが、奇をてらうことなく、かといって古臭いわけでもなく、現代を生きる私たちの感覚にとってもフィットする内容になっています。

“鑑賞”というよりも“体感”！ それこそがオペラ観劇の醍醐味。

たとえばオペラをまだ観たことがない方も、ぜひ一度ライブ鑑賞で、劇場の空気感を体験していただきたいです。観劇の際いつも思うのですが、いい公演というのは出演者が熱のこもった演奏をするだけでなく、それを受け止める聴衆の思いが出演者に伝わるもの。そして、そこから生まれる緊張や集中が相乗効果となり、なんと申しますか「すごいものに遭遇している」という実感になるのです。その場にいるからこそ共有できる一体感は、ライブでしか味わえません。ぜひその特別な感覚を劇場で確かめてください。(H)

Q

アートを通して伝えたいこと、実現させたいこと



©FUKAYA
Yoshinobu / auraY2

『ニュルンベルクのマイスタージンガー』
出演 (ダーヴィット役) / 声楽家 (テノール) :
望月哲也さん

歌手として、なぜ歌うのか？
もちろん自分の欲求から歌うこともあります。1番の理由は、「私の声で、美しい言葉やメロディをたくさんの方に聴いていただきたい」からです。人の心を癒すことが出来たら、どんなに幸せなことか。コロナ禍ではありますが、いつかきっとまた音楽を普通に聴ける日々がやってくると思うので、頑張りましょう。

『ニュルンベルクのマイスタージンガー』
制作 : 佐藤さやかさん



人と人との交わりが難しい状況が続きますが、ライブでしか味わえないアートの醍醐味が忘れられないように、伝えていきたいです。そして、舞台と客席の思いが融合、共鳴、呼応して起こる相乗効果、時間芸術の無限の高まりを体感していただきたいです。

※東京文化会館公演は、新型コロナウイルス感染症の影響により中止になりました。

REPORT

Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13 「光の速さ -The Speed of Light-」

東京の街中の公園の『浜辺の歌』からはじまる、体験する観劇

“虚にして虚にあらず。実にして実にあらず”という近松門左衛門の言葉がある。アルゼンチン・ブエノスアイレス出身の演劇・映像作家、マルコ・カナーレ氏による演劇プロジェクト『光の速さ -The Speed of Light-』を鑑賞して、その言葉を想起した。一般公募から選ばれた13人の役者の方々のみならずアマチュア。そしてシニアと呼ばれる方々。当初の開演時期の2020年夏に向けて、2019年秋から稽古がスタートとしたということなので、2年近くの準備期間があったとのこと。

観劇体験は、まず都内の公園での受付からはじまる。受付を済ますと、鉢植えを囲みながら、出演者が『浜辺の歌』を謡って挨拶。その後、観客は3つのグループに分けられると出演者とともに鉢植えを持参し、ゆっくり近くの第2会場に向かう。3ヶ所ある第2会場のひとつで太子堂八幡神社の境内にある御神木の近くに置かれた仮設ベンチに座り、出演者の体験や思い出が書かれたメモ書きを渡される。戦後復興時の生活風景や家族との時間のこと。自身の幼少期や東京の街のこと。読み上げると、関連した昭和の歌謡がうたわれる。出演者の本当の思い出なのかどうか、すでに観客はわからなくなる。多くの共通した体験を持っているからなのか、誰かの思い出と“私”の記憶の区別がなくなっていく不思議な体験だ。その後、持参した鉢植えも置かれた同神社境内の特設ステージに移り、メインのストーリーがはじまる。ある能楽堂の存続が取壊しかでもめる一家の歴史を軸に、出演者たちそれぞれの人生や今回の演劇に応募した想い、演出家であるカナーレ氏の父親との複雑な関係などがパラレルに展開していく。ここでもまた、どこまでが本当の話で、どこからが創作なのか。その境界があいまいなまま、次々と場面転換していくステージに引き込まれていくのだ。



Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13
『光の速さ -The Speed of Light-』 演劇公演
作・演出：マルコ・カナーレ



最初のステージ、西太子堂公園。
© 松本和幸



ステージ2。
出演者の思い出を観客が読み上げる。
© 松本和幸



ステージ2。
観客は3つのグループに分かれて参加。
© 松本和幸

世界各地で上演される、その土地とコミュニティの記憶の物語

今回のような演劇プロジェクトをカナーレ氏は、ブエノスアイレスのFIBAと呼ばれる演劇フェスティバルをはじめ、ドイツでも上演。その土地が持つ歴史や文化をテーマとして、ドキュメンタリーとフィクションを織り交ぜながら、各地のコミュニティと作り上げている。

この公演のために造られた屋外ステージのある境内では、上演中も参拝の方々が通り過ぎていく。また木々のさざめきや野鳥のさえずりも効果音のように加わる。劇場とはまた一味違った屋外ステージならではの興がある。さて、冒頭の近松の言葉には続きがあって、“この間に慰みがあったものなり”（『虚実皮膜論』）とのこと。虚と実の間にこそ、慰みがあると書いた。『光の速さ』では、能楽堂に想いをさせる老女は、魂の彷徨の旅に出かける。父の最期を見守りたい演出家は、舞台から去って故郷へ向かう。2021年の東京の街で繰り広げられた虚と実の世界は、放縦な“間”をつくり、観客たちを魅了しているように映った。

(O)



ステージ3の上演風景。
© 松本和幸



ステージ3の上演風景。
© 松本和幸



出演者による感動のフィナーレ。
© 松本和幸

TOPIC Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13 「東京大壁画」

東京の玄関口、東京駅丸の内建つ丸の内ビルディングと新丸の内ビルディング。並んだ2つのビルの壁面、巨大なガラスウォールに巨大な壁画、その名も東京大壁画が今夏表出する。今回このプロジェクトの企画運営を行う株式会社ドリル（細川直哉さんをはじめとする4名）と協力を行う株式会社アタマトテ・インターナショナルの榎本了壺さんに作品に込めた想いを伺った。



株式会社ドリル
エグゼクティブ・クリエイティブ・ディレクター
細川直哉さん



株式会社アタマトテ・インターナショナル
代表
榎本了壺さん



丸ビル・新丸ビル制作風景

ふたつでひとつの大きな世界観

「ふたつの壁面を合わせると約7500㎡を超える大きさになります。日本の文化・芸術のすばらしさを世界に向けて発信し、何十年後でも“ああ、あれはすごかったな”と思い出してもらえるようなシンボリックなメッセージを込めたかったというのが企画の出発点でした。この大きさのパブリックアートの壁画はこれまでにない世界最大級のものだと思います」（細川さん）
このチャレンジに賛同して作品制作を担当したのが横尾忠則、横尾美美の両氏だ。

「対になっているということで、作品同士の対話だったり、ふたつでひとつの世界を構築するような関係性がうまれて、もっと大きな物語が表現できるというコンセプトに両氏に賛同いただき、さまざまなディスカッションを通して、“火”と“水”というテーマが決まりました」（榎本さん）

祝祭的なモニュメント以上の意味が 作品に込められている

企画コンセプトは「宇宙 COSMO POWER」。

「グラフィックデザイナー、イラストレーターそして画家として常にジャンルの草分けとしておおきなうねりをもったアーティスト活動を展開してきた作家・横尾忠則氏は、アートに対しても深く強い想いをお持ちです。日常的なものから神話的世界、精神世界までその表現領域も深化されています。根源的なエネルギーをとらえようという欲求の氏とそれに果敢に挑む横尾美美氏。今回、アートの力の象徴という祝祭的なモニュメント以上の意味のある作品が生まれたというのが、一番の獲得点ではなかったかと思います」（榎本さん）

「制作過程のディスカッションが、すでにレジェンドでしたね（笑）“計算しすぎちゃダメなんだ”など、横尾忠則氏の発言ひとつひとつが金言です。プロセスそのものが、すでに作品の一部でもあるんだと思いますね」（細川さん）



横尾美美氏作品（一部）
テーマ「火 (ignis)」



横尾忠則氏作品（一部）
テーマ「水 (aqua)」

見どころ

“水 (aqua)”をテーマにした横尾忠則氏。“火 (ignis)”をテーマにした横尾美美氏。両氏の作品が巨大な双壁となって掲出される。「ずっと向き合ってきた滝をモチーフに、膨大な古今東西のコレクションのうち2000枚を超えるポストカードから構成されたのが“水”です。流れ落ちる水の迫力に対して、天高く上昇していく“火”。ふたつは生命の循環のような相関関係になっています。また、それぞれに細部はとても緻密に描かれています。ぜひ双眼鏡などを使ったりして、遠くから鑑賞したり、近づいて見たりという探索を楽しんでほしいですね」(榎本さん)

「2021年のオリンピック・パラリンピックの時期に公開される今回の作品ですが、新型コロナウイルスで世の中の価値観や見方はいろいろ変化しました。でもこの作品から発信される強いメッセージは普遍的なものだと思います。横尾忠則さん、横尾美美さんでなければ、この壁画は完成しなかったのではないかとさえ思います。時代が変わっても残るアートの力をぜひ感じてほしいですね」(細川さん) (O)



プログラム

東京駅の目の前、丸の内ビルディングと新丸の内ビルディングの壁面が今夏巨大なキャンパスになります。横尾忠則、横尾美美の両アーティストによる生命賛歌「東京大壁画」。期間限定公開です。

実施期間：2021年7月17日(土)～2021年9月5日(日)

入場料：無料

実施場所：丸の内ビルディング(東京都千代田区丸の内2丁目4-1)
新丸の内ビルディング(東京都千代田区丸の内1丁目5-1)



横尾忠則
1936年兵庫県生まれ。美術家。72年にニューヨーク近代美術館で個展。その後もパリ、ヴェネツィア、サンパウロ、など各国のビエンナーレに出品し、パリのカルティエ財団現代美術館など各国の美術館で個展を開催。15年高松宮殿下記念世界文化賞、令和2年度東京都名誉市民顕彰。7月17日より東京都現代美術館での大規模な個展が開催される。



横尾美美
画家。1994年「Tadanori & Mimi YOKOO」展で展覧会デビュー。1995年個展開催から、東京を中心に、全国各地で開催。2000年 PLEATS PLEASE ISSEY MIYAKE MILLENNIUM、Spring Summer 2000 を担当。最近では me ISSEY MIYAKE “MIMI YOKOO”の第一弾(2017年)から第三弾(2020年)までコラボレーションを展開。

Q

アートを通して伝えたいこと、実現させたいこと

株式会社ドリル

エグゼクティブ・クリエイティブ・ディレクター：細川直哉さん

今回のプロジェクトを通して、アートって本当にすごいなと実感しました。アートは人間性の追求だと思いますが、本当のアートの力を見せてもらった気がします。世の中の見方がたとえどれだけ変わっても、それをを超えるようなメッセージを発することができるんです。

株式会社ドリル

エグゼクティブ・プロデューサー：江成修さん

カウバレード東京や丸の内ストリートミュージアム、大阪アートスクランブル、大阪ミラノデザインリンクなど様々なパブリックアートイベントを手がけてきました。街中で突然アートに出会った時の言語化できない感情のゆらぎみたいなものを一人でも多くの人に体験してもらいたいと思っています。

株式会社ドリル

テクニカル・プロデューサー：伊吹圭策さん

アートはその時代時代において、科学や社会そして人間自身を前進させる発想の源になってきたのだと思っています。この厳しい時代においても、その役割は変わらず、むしろ最も必要な感覚なのかもしれません。テクノロジーが発達し、誰もが「アートの」感覚をアウトプットできる現代、あらためて「アートの力」を未来を担う人々が体感し、刺激を受け、より豊かでオリジナリティ溢れる発想が無数に生まれ出ることを願っています。



一番左
榎本了彦さん、
二番目から
株式会社ドリル
江成修さん、
伊吹圭策さん、
細川直哉さん、
西田淳さん

株式会社ドリル

コンテンツ・プランナー：西田淳さん

固定化し閉塞感を作り出す社会のライン、顕在化し高くなっていく人々の分断のライン、無意識的に行動を萎縮させる個人のライン。アートを作る力と見る力は、これら様々なレイヤーでの「境界線」に対する気づきと、それを乗り越えるパワーを与える。アートはこれからますます必要になると思う。

アタマトテ・インターナショナル

代表：榎本了彦さん

アートマーケットにこだわりすぎると、戦略的な表現が優先しかねない。本来アートが発する強いメッセージが希薄になる懸念があります。横尾忠則さんは、そうした作家とは違って、アートが持つ力を信じる作家のお一人だと思いますが、その作品によって表現するのはどうということかという問いをもう一度考えたいですね。

REPORT

Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13 「TOKYO SENTO Festival 2020」

古代ギリシアからプロジェクションマッピングまで！
東京の銭湯のホットなアートプロジェクト



今、東京の銭湯がとっても熱いのご存じでしょうか？ とはいっても、お湯の温度設定が高くなったということではありません。

銭湯でアート体験ができるホットなイベントが開催されています。

この「TOKYO SENTO Festival 2020」は、古くから交流の場としても愛されてきた銭湯からアートを発信。日本を代表するアーティストとのコラボレーション等を2021年5月26日（“ゴー、風呂”の日！）からスタートしています。

「TOKYO SENTO Festival 2020」には大きく3つの楽しみがあり、それは「銭湯アートプロジェクト」、「のれんアート」、「スタンプラリー」。「銭湯アートプロジェクト」は、日本を代表する様々な分野のアーティストが、都内4つの銭湯に作品を描き下ろしています。その中の1つ、『テルマエ・ロマエ』の作者、漫画家のヤマザキマリ氏が原画を描きおろし、銭湯絵師の田中みずぎ氏監修により描かれたペンキ絵をぜひ見たくて、代々木八幡駅近くの八幡湯へ行ってきました。（取材日：2021年5月26日）



代々木八幡駅から徒歩すぐの八幡湯（渋谷区）。青い看板が目印



八幡湯壁画（男湯） 壁一面に描かれたペンキ絵は見応えあり！



八幡湯壁画（女湯）



ヤマザキマリ氏による八幡湯のための原画

古代ギリシアのバラネイオンが 2021年の東京に出現。

代々木八幡駅近くにある八幡湯は、昭和の香り漂う昔ながらの“ザ・銭湯”という趣き。ヤマザキ氏の作品は、古代オリンピックのある日の風景が描かれたもので、バラネイオンがテーマ。バラネイオンとは紀元前五世紀ごろより古代ギリシアにあった共同温浴施設のこと。そして（私が入った）女湯の壁には、オリュポスの山からギリシアの女神たちが地上で運動する男たちを眺めている様子が描かれていました。男湯は覗けませんが（当たり前ですね!）、浴室には原画も飾ってあります。今回、ヤマザキ氏が原画を手掛け、それをもとに、全国には数人しかいない&女性で唯一の銭湯絵師の田中みずき氏が監修を行い完成させたそうです。

八幡湯の銭湯アートに触れ、他の3つの作品にもますます興味が湧き、見たい気持ちが高まりました。でも、くれぐれも気を付けたいのは、壁画アートの楽しさにのぼせても、本当にのぼせないように注意しなくては。なんといってもそこは銭湯なのですから。(H)

REPORT

伝統芸能フェスティバル

「神楽坂まち舞台・大江戸めぐり 2021」



Kagurazaka Street Stage O-edo Tour 2021
Japanese Traditional Culture Festival

和楽器奏者の手元アップなど、 ライブ配信ならではの魅力が満載!

江戸時代の地割りが今に残る街・神楽坂。大通りから1本奥に入ると趣のある石畳の路地が現れ、風情を感じる街並みに出合える。個人的にも大好きなこの街で開催される、伝統芸能フェスティバル「神楽坂まち舞台・大江戸めぐり 2021」は、今年で9回目。

今回は新型コロナウイルスの影響で、5月22日(土)、23日(日)、全てのプログラムがライブ配信となり、さまざまなジャンルの伝統芸能が、じっくりと、しかもアップで見られるという動画配信ならではの嬉しいメリットが!

現在、全てのプログラムがアーカイブ配信されているので、ぜひご覧いただきたい。

ここでは、その中から2つのプログラムを紹介する。



【お座敷ライブ】

22日(土) 12:00～13:30

創業150年の歴史を誇る神楽坂のうなぎ割烹「志満金」のお座敷からライブ配信。
着物姿の案内役は、日本語でのノリツッコミも完璧なフランス人落語パフォーマー、シ ril・コピーニ氏。約90分間にわたり、江戸の芸能を堪能できる。

<出演>岡村慎太郎+岡村愛(箏曲)×庄野文山(尺八) 本條満留ひで+本條秀英二(端唄) 神楽坂芸者衆(踊りほか)

特に興味深かったのは、未知の世界である「お座敷遊び」。戦前の神楽坂では600人ほどいた芸者衆も、今では20人だそう。ちなみに、顔が白塗りなのは“ろうそくの灯のもとでも映えるように”とのことだ。なるほど。

現役の芸者衆による唄、三味線、お囃子、踊り——と、貴重な芸を堪能した後は、お待ちかね(!?)のゲーム! お座敷では食事の合間、お酒を楽しみながら行われるそうだ。

「とらとら」(屏風越しに「とらと〜らと〜らとら♪」と唄いながら、体を使ったじゃんけん)、「菊の花」(1人ずつ伏せてあるお猪口を開け、菊の花が出た人が開いているお猪口の数だけ酒を注いで呑まねばならない)など、風流な遊びを垣間見ることができる。



【神遊びライブ】

23日(日) 12:00～13:30

神楽坂のライブハウス「THEGLEE」から、神楽坂にゆかりのあるアーティストたちによる演奏がライブ配信。

<出演>尺八カルテットGMQ(尺八) セ三味ストリート(津軽三味線パフォーマンス) 真鍋尚之(笙) 遠TONE音(尺八×箏×ギター) 鳥羽屋里夕(ご案内)

700年以上の歴史を持つ赤城神社の境内で行われる予定だった「神遊びライブ」。冒頭に登場したのは、東京藝術大学邦楽科を卒業したメンバーが中心となり結成された尺八カルテット。GMQについて、メンバーによる「藝大・問題児・カルテットです!」という“つかみ”で始まった(笑)。

そこから約90分間、和楽器のイメージを覆すようなパフォーマンスが繰り広げられた。ライブを観終わって感じたのは、和楽器の奥深さ。平安時代から日本人が奏でてきた笙、人間の歌声に近いという尺八(今はメタル尺八も!)、アクロバティックな三味線パフォーマンス……等々。「この楽器でこの曲を!?’と、超絶技巧が奏でる現代曲に驚きの連続だ。

神楽坂のまちと伝統芸能のアーティストが一体となって開催する同フェスティバル。来年は、街の気配を感じながらリアルに鑑賞できることを願いつつ、今年は自宅でオンラインならではの楽しみ方を、ぜひ!



REPORT

伝承のたまてばこ

～多摩伝統文化フェスティバル 2021～



多様多彩に染められ、幾重にも紡がれ交差した 伝統と現代の色鮮やかなコラボレーション

5月29日(土)・30日(日)にオンライン動画配信にて開催された「伝承のたまてばこ～多摩伝統文化フェスティバル 2021～」。多摩地域の伝統文化が集結する文化・芸術のイベントで、車人形、お囃子、農村歌舞伎、影絵など多彩なプログラムが楽しめる。ここでは、「楽劇高尾山～平家美少年哀切譚」「地芝居を楽しむ! 秋川歌舞伎」「SHIKISAI ～染物ダンスパフォーマンス～」について紹介する。

楽劇高尾山 ～平家美少年哀切譚

まず「楽劇高尾山」は、能楽師・山中迩晶氏と高尾山薬王院住職・佐藤秀仁氏による解説から始まり、その後、山伏による法螺貝の音色と声明(しょうみょう)に導かれ本編へ。この薬王院との声明コラボレーションをはじめ、物語の鍵となる琵琶に施されたアートや、衣装デザインも地域にゆかりのある作家が手がけており、独自性と地域性の高い舞台を創造。能「経政」を軸とした本編は、体の奥底から発せられる謡いが魂の叫びを表現。経政の哀愁が気品とともに溢れ、配信終了後も余韻が残り、しばし呆然としてしまったほど。2021年8月25日(水)から8月31日(火)まで、アンコール配信(有料)の予定もありますので、ウェブサイトの情報をお見逃しなく。



地芝居を楽しむ！秋川歌舞伎

「秋川歌舞伎」は、農村歌舞伎というだけあってなんとも親しみやすい世界観。演目「仮名手本忠臣蔵七段目祇園一力茶屋の場」の所々に現代のタイムリーなネタも盛り込んであり、クスッと笑えるポイントも多い。何より少年2人による口上がハキハキとしていてとてもよかった。総じて、伝統文化を大切に引き継いでいこうという演者たちの心意気を感じた。



SHIKISAI ～染物ダンスパフォーマンス～

そして「SHIKISAI」。八王子の染織産業にフォーカスしたダンスパフォーマンスで、世界的に活躍するMAYA氏が演出。自ら工場を訪問し、職人に聞いた話や機織り機などにインスピレーションを受け、実際に組み紐をダンスに取り入れたり、機織り機の音をサンプリングに使用。オリジナルテキストスタイルや衣装、糸を表現したライティングも効果的で、染織産業へのオマージュを込めつつステージを染め上げていく。ぜひアーカイブ配信でチェックを。(H)



MAYA氏



TOKYO MET SaLaD MUSIC FESTIVAL 2021 【サラダ音楽祭】



東京都交響楽団 竹末健太郎さん



東京芸術劇場 曾宮麻矢さん

歌う！聴く！踊る！赤ちゃんから大人まで楽しめる音楽祭♪

東京都と東京都交響楽団（以下：都響）が、東京芸術劇場（以下：芸劇）及び豊島区と連携して多彩なプログラムを展開する「TOKYO MET SaLaD MUSIC FESTIVAL」、通称「サラダ音楽祭」が今夏も開催されます。今年ならではの聴きどころや見どころ、取り組みなどを、制作担当の都響・竹末健太郎さんと芸劇・曾宮麻矢さんに伺いました。

0歳から入場OK！ 赤ちゃんの泣き声もコンサートを 形作る大事な一部です

竹末さん：「サラダ音楽祭」のサラダ(SaLaD)は、Sing and Listen and Danceの頭文字をつなげた造語で、その名の通り、歌う、聴く、踊るがコンセプトの音楽祭。目玉としてはまず、都響音楽監督の大野和士が指揮する「OK! オーケストラ」と「音楽祭メインコンサート」があり、それから「子どものためのオペラ『ゴールド!』」、その他にワークショップやミニコンサート、バーチャルオーケストラの指揮体験なども予定しています。

赤ちゃんから入場OKの「OK! オーケストラ」は、泣いても笑ってもOKのコンサートで、とってもご好評いただいています。子ども向け番組でおなじみの小林顕作が司会を務め、『ドラゴンクエスト』のゲーム音楽から『天国と地獄』のようなクラシック音楽まで幅広いジャンルの音楽を演奏し、ダンスではコンドルズが登場して視覚的にも楽しめます。東京少年少女合唱隊の元気な歌声にも注目です。



司会の小林顕作



OK!オーケストラ サラダ音楽祭 2019公演記録写真
写真中央は指揮者の大野和士



ダンス集団コンドルズも3年ぶりに登場



東京少年少女合唱隊が元気な歌声を披露
© LSOT-a

サラダ音楽祭のエッセンスが凝縮された 音楽祭メインコンサート

竹末さん：「音楽祭メインコンサート」は、都響と豪華ゲストとのコラボレーションをお届けします。昨年に引き続きNoism Company Niigata（ノイズム・カンパニー・ニイガタ）と1曲目から共演し、「ザ・チェアマン・ダンス」を披露します。続いて日本を代表するハープ奏者の吉野直子との共演、そして、マーラーの交響曲第5番より「アダージェット」で魅せるNoism 井関佐和子のダンスはぜひご覧いただきたいです。さらにラストは、活躍目覚ましいソプラノ歌手の小林厚子と新国立劇場合唱団と豪華共演するプーランクの大曲「グローリア」という内容で、私自身も今からわくわくしています。



「今年もサラダ音楽祭の季節が来たね、とってもらえるくらい定着させたいですね」と竹末さん(左)



音楽祭メインコンサート サラダ音楽祭2019
公演記録写真
東京都交響楽団と新国立劇場合唱団



音楽祭メインコンサート サラダ音楽祭2020
公演記録
写真右は、井関佐和子(Noism Company Niigata)



指揮 大野和士
© Rikimaru Hotta



ハープ 吉野直子
© Akira Muto



ソプラノ 小林厚子
© Yoshinobu Fukaya

ちょっと不思議な物語を双方向・参加型演出で！ 子どものためのオペラ『ゴールド！』

曾宮さん：昨年、子どものためのオペラは見送りとなってしまいましたが、今年は新型コロナウイルス感染症拡大防止対策に取り組み、公演を実施します。お客様には、客席で着席してご鑑賞いただく形をとりませんが、公演の内容、つまりソフト面では双方向・参加型で楽しめる演出を取り入れる予定です。この『ゴールド！』という作品は、グリム童話を題材にしたオペラで、舞台上にはソプラノ歌手と打楽器奏者の2名のみ。それぞれがいくつもの役を演じ分け、独特な世界へと子どもたちを引き込みます。今はコロナ禍ということもあり、人との繋がりが薄れがちですが、本当に大切なものは何かということを気づかせてくれる内容です。



少年ヤーコプとふしぎな魚のものがたり

バラエティ豊富なラインアップ！ ワークショップやバーチャル指揮体験も



「コロナ禍だからこそ観て聴いて感じて欲しい内容のオペラです」と曾宮さん



「歌って、聴いて、踊る」の要素が詰まった音楽祭は他にないと思いますよ」とお二人

竹末さん：昨年、新型コロナウイルス感染症の影響で中止となった「SaLaDワークショップ」を今年は感染症対策を万全に取り組み、開催します。残念ながら応募受付は終了していますが、都響メンバーと一緒に演奏できるワークショップをはじめ、歌やダンスのワークショップ、カホンを作るワークショップも行う予定です。また、当日の受付で参加いただける「バーチャルオーケストラを指揮しよう！」は、大画面に映し出される都響を自分が思うとおりに指揮することができます。ぜひご参加ください。

曾宮さん：音楽祭に合わせて行う劇場ツアーもおすすめです。各ワークショップでは「サラダ音楽祭」ならではの「歌って、聴いて、踊って」を、各分野の第一線で活躍するトップアーティストから直々に学び、体験できるプログラムばかりです。また、昨年に引き続き「SaLaD 動画コンテンツ」も順次公開しておりますので、ご自宅でも多彩で盛りだくさんの「サラダ音楽祭」をぜひ楽しんでください。(H)

Q アートを通して伝えたいこと、実現させたいこと

「サラダ音楽祭」制作 / 東京都交響楽団：竹末健太郎さん

アートって何だろう…と考えたとき、1つの答えとして、クリエイターの作品や表現をとおして多くの人とつながることができる、人間が生み出した不変的な「手段」だと思いました。

自由に生活がしにくい世の中で、アートの自由さまで失われてしまうと、さらにつながりが希薄した世界にならねません。



「サラダ音楽祭」では多様なアートを感じることができる場として、多くの人とつながる、そんな音楽祭を実現できればと思います。

「サラダ音楽祭」制作 / 東京芸術劇場：曾宮麻矢さん

劇場はアーティストがいることで息をして、それを感じ取る聴衆があって、初めて血が通った劇場になります。

心揺さぶられ、感動し作品から気づかされた思いから、他を知ること自身を知り、日々の活力に繋がるのだと感じています。そして、人の手によって丁寧に作られたアートこそが、どんな時代においても、心の奥深くまで届き、人々を魅了する力があるのだと思います。

多様性が求められる社会において、様々な方にアートを伝え、コロナ禍において変わりゆく価値観の中で、変わらぬ普遍の美しさや、新しい魅力を発見できる場所、ワクワクを届けられる場所、そんなアートの百貨店のような、存在になれたらと思います。そして後に、2020年代の東京の文化として、今を振り返る事ができたのなら、文化の一翼を担う立場として非常に嬉しいことだと思います。

REPORT

Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13

「パビリオン・トウキョウ 2021」

建築家・芸術家が想いを込めたパビリオンを巡るイメージツアー

新国立競技場を中心に、都内の複数の場所に期間限定でパビリオンが出現します。パビリオン・トウキョウ 2021と名付けたこの催事。世界で活躍する建築家や芸術家が、それぞれの想いを込めた作品を今夏の東京で発表しています。

草間彌生氏の人気の『オブレーションルーム』が出現

渋谷区役所の第二美竹分庁舎内に設けられた特設家屋。家具からインテリア、柱にいたるまで真っ白な部屋の中に、草間彌生氏が生涯大事にしている水玉に見立てたシールを入場者は貼っていきます。オブレーションとは、消滅の意味。3部屋内がカラフルなシールでいっぱいになると、空間が消滅し、やがて自己の意識も水玉の中に消滅していくという感覚を味わう。

「世界各地で毎年催されている草間彌生アートの中でも人気のインスタレーションのひとつ。3部屋というのは世界初ではないかと思ひますし、今回のようなイベント的なグループ出品に参加することも異例なこと。今年の東京でこのインスタレーションを行う意味ということも参加する方々に訴えるところがあるのではないかと思います」と、このパビリオン・トウキョウ 2021の企画者であるワタリウム美術館の和多利浩一さんは感慨深く語ってくれました。



真っ白な室内が、カラフルな水玉シールで埋められています。



パビリオンの狙いを説明する和多利浩一さん。

“動”で“巨”な新国立競技場を見上げる“静”で“微”の茶室

1階の楕円の引き戸を開けると待合室があり、にじり口の意味という細い梯子を上るとそこには四畳半の茶室。建築家の藤森照信さんは「小さなものから大きなものが見たい。ここから新国立競技場を見上げるといいでしょ」と少しいたずらっぽい雰囲気であいながら語ります。『茶室「五庵」』は、高麗芝と呼ばれる国産芝で覆われ、茶室部分の2階は焼杉の黒い板で覆われています。微細な構造をじっくり見て楽しんだり、新国立競技場との対比を楽しんだり、さまざまな時間が過ごせます。これまでも『高過庵』での木の上の茶室や『ラ コリーナ近江八幡』の草屋根など人工物と自然を融合させる建築物を発表してきた藤森照信さん。

「新国立競技場もローマ時代から続く古典的な形を活かした建造物。この茶室もとてもクラシックなかたちをしているんです。是非両方の場所からの視点でそれぞれを見て楽しんでほしいですね」



2階の茶室から新国立競技場を見る建築家の藤森照信さん。



茶室「五庵」設計：藤森照信
撮影：ToLoLo studio

ダンボールとブルーシートという素材に込めた想い

「とても悲しくて残念なことですが、日本は災害の国です。だからこそ、ダンボールやブルーシートに助けられる場面が少なくない。僕にとっては、とても重要な素材のような気がしてしょうがないんです」と銀杏並木の入り口に建つ『東京城』の作品の前で会田誠さんは話してくれました。

お城のかたちを模した東京城の土台は、江戸城の石垣を使って、関東大震災後のバラック建設の指揮官だった佐野利器氏により設計されたもの。因縁のようなつながりも感じさせるこの作品ですが、会田さんは提案当初「“了承されないのではないか”と思った」と言います。「いろいろな方々のご尽力でできることになったときに、僕がとても驚きました」とのこと。



東京城を背景に、作品に込めた想いを語ってくださった美術家会田誠さん。



都民に愛される銀杏並木の入り口に建つ2つのお城。

特別な耐水性をそなえた特注ダンボールと、土嚢を配置して大工職人によって縄で固定されたブルーシートでできた2つの作品。解説には「人間のしなやかな強さ」を示すとも記されていますが、見学者にさまざまな想いを喚起させるこのパビリオン。コンクリート建造物が立ち並ぶ大通りという借景の影響も手伝って、忘れられない作品となるでしょう。

パビリオン・トウキョウ2021ではこのほかにも、曲水と呼ばれる平安時代の庭園の水路をイメージしたパビリオン『水明』(妹島和世氏)をはじめ、あこがれのような存在という雲をイメージした『Cloud pavilion』(藤本壮介氏)、国連大学前の広場では大きな孔だらけのお椀のような形状の『Global Bowl』(平田晃久氏)、kudan house内には焼杉による日除けにもなりそうな建造物『木陰雲』(石上純也氏)、旧こどもの城前には劇場のような道というテーマで建造された『ストリートガーデン シアター』(藤原徹平氏)が出現。また、ワタリウム美術館前の空き地には中止になったイベントを抽象的な画像やテキスト表記で見せる『2020-2021』(真鍋大度氏+ライゾマティクス)も展示されています。実際に各パビリオンをまわれなくても、それぞれの作品に込められた想いにイメージを膨らませながら時空を超えた旅のような感覚を楽しむのも一興ではないでしょうか。

(O)



森の中に現れる雲、代々木公園の『Cloud pavilion』。



水明 設計: 妹島和世
撮影: 妹島和世建築設計事務所



通り抜けたり、中の孔から空や高層ビルを眺めたり『Global Bowl』。

REPORT

Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13 「東京大壁画」

東京の玄関口、丸の内に現れた世界最大規模の双壁画

例えば、遠くから見ると近くで見るとで全然違うように見えるものって何でしょうか? と質問されたら、どう答えるでしょうか。山とお答えになる人がいるかもしれません。遠くから見ると雄大な山を実際に登山などで歩いてみると多くの植物や生物に満ちた自然があります。同じ物体なのに遠くと近くで確かに大きく違います。東京大壁画の鑑賞も遠くと近くで見るとものがまったく違います。7000㎡を超える世界最大規模の巨大壁画をどうやって楽しもうかと想像を巡らせるのはとても贅沢なことです。

2021年、東京、新丸の内ビルディングと丸の内ビルディングの2つの高層ビルの壁面を使って発表された横尾忠則氏と横尾美美氏による巨大壁画・東京大壁画。水(aqua)をテーマにした横尾忠則氏と火(ignis)をテーマにした横尾美美氏。

実は東京駅をはさんだ八重洲口のビル内からは、この2つの作品の全体像を鑑賞できるスポットがあります。絶妙な配置によって、有機的につながりあう作品のパワーが東京の街の中に浮かび上がっているような気持ちにさせられます。



撮影場所: XEX TOKYO 大丸東京店遠景から見える東京大壁画。
右側が横尾忠則氏による「水」、左側が横尾美美氏による「火」。



2つのビルの作品を前にした完成披露発表会の模様。



飾る1枚にそれぞれサインをして、無事完成。



朱色を基調にしなが、
細部に書き込まれた生物群。



近づくと見えてくる滝、滝、滝…。
圧倒されます。

そして、今度はガラスウォールに近づいてみましょう。東京駅前の広場から、見上げて壁画の細部を見てみると、今度は遠景とはまったく違う様相でそれぞれの作品が迫ってきます。忠則氏の作品は、世界各地から長年集めた滝の絵葉書が、びっしり並びながらひとつとして同じものがありません。多様であるがままの肯定感が頭上から降ってくるようです。一方の美美氏の作品は、無数とも思える植物や動物、なかには大好きというパンダも描かれているのが発見できます。

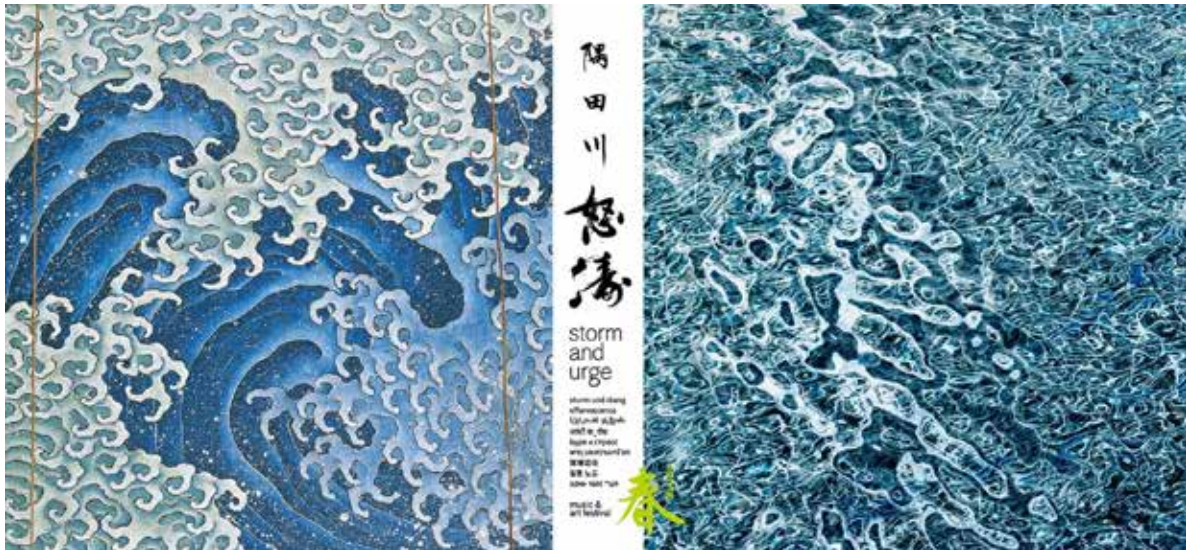
7月17日に催された完成披露発表会で、横尾忠則氏・横尾美美氏がそれぞれ1480枚目、798枚目に、完成の証としてサインをされました。この1枚ももちろん近くに寄ってみると確認することができます。

東京駅周辺には、たくさん的高層ビル群と駅前広場があります。鑑賞する位置によって違ったイメージを喚起させる大壁画。ぜひ自分だけのベストスポットをお探しください。

(O)

REPORT

Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13 「隅田川怒涛」



© 一般社団法人 北斎館

音楽とアートの参加型フェスティバルを「春会期」「夏会期」で開催

日本を代表するアーティストたちによるパフォーマンス、インスタレーションなどが堪能できる「隅田川怒涛」は、隅田川の南北約10kmをひとつの舞台に見立てた、音楽とアートのフェスティバル。

オンライン開催となった春会期「浜離宮アンビエント」「ことばの渡し」「エレクトロニコス・ファンタスティコス!～家電集轟篇～」から、2つのプログラムをレポートします。

【浜離宮アンビエント】

5月22日(土) 18:30～20:00

配信会場は、開催当時臨時休園中だった浜離宮恩賜庭園。東京屈指の庭園だが、残念ながら無観客開催に。



出演は、映画、演劇、ダンス、CM楽曲、音楽プロデュースなど多方面で活躍中の蓮沼執太氏と、彼が率いるオーケストラ「蓮沼執太フィル」、そしてゲストアーティストの大崎清夏氏、音無史哉氏、角銅真実氏、寺尾紗穂氏。

心配された天気は開始時刻まで何とか持ちこたえ、遠くには晴れ間も見える。出演者は全員が和服姿で登場。薄暮の時間帯に笙の音色が広がり、1曲目がスタートした。

演奏は全7曲。

昨年、リモートでお互い1度も会うことなく完成させたという「Imr」、メンバーが事前に綴った詩を演奏とともに朗読する新作「私は思い描く」などが披露された。

“アンビエント”には“環境の”という意味もある。演奏が進むにつれ、暗くなった庭園にぼうっと灯がともった。画面越しながら幻想的な空間を楽しんだこの1時間半は、彼らが奏でる音が緑の木々に降り注ぐような、夜空に溶けていくような、そんな感覚を味わった。



© 川島悠輝



© 川島悠輝



© 川島悠輝

【エレクトロニコス・ファンタスティコス!～家電集轟篇～】

5月23日(日) 18:00～19:30

足立区千住のMURASAKI PARK TOKYOから配信され、こちら
も無観客開催。

出演は、日本のみならずアジアやヨーロッパでもライブや展示
活動を展開する和田永氏だ。

前半は、Zoom画面を通じての「シマシマ演奏体験」ワークショッ
プ。これが、なかなかユニークで面白い!

テレビの映像と音の端子を差し替えると、画面にシマ模様が出現
する。それを逆に「シマ模様を読み込むとどんな音が出るか?」
という実験だ。

さまざまな国の参加者が、ボーダーのトップスなど各自が用意した
「シマシマ」を、Webカメラの画面に近づけたり遠ざけたりして
映し出すと、ビューーンビューーンと何ともいえない音が鳴る。

実験の内容自体も興味深いのが、画面越しに伝わってくる“和田氏
自身が楽しんでいる姿”が、何より印象的。ワクワク感で伝染
するものらしい。こんな伝染ならウエルカムだ。

タイトルにもなっている「エレクトロニコス・ファンタスティコス!」
とは、和田氏が2015年より取り組んでいる、使われなくなった
電化製品を新たな電磁楽器として蘇らせるプロジェクト。

後半は、その家電楽器による演奏をNicos Orchest-Labメンバー
と共に奏で、会場に設置されたバーコードの上を、バーコードリー
ダーが貼り付けられたスケートボードで“滑り鳴らす”という驚き
のパフォーマンス!



© 山本マオ



© 山本マオ



© 山本マオ



© 山本マオ

あっという間に1時間半が過ぎた。

ワークショップには小学生くらいの子どもも参加していた。

このプロジェクトは、テクノロジー、アート、遊びと、あらゆる角度から子どもたちの興味をひき、その夢を広げていくに違いない。

夏会期は8月13日(金)～9月5日(日)に決定!

1つ1つのプログラムが、見応え十分の「隅田川怒涛」。

夏会期もオンラインとオフラインを駆使し、坂本龍一氏や高木正勝氏などの豪華アーティストを迎え、3つのプログラム「自然を主旋律としてピアノは調和を」「water state 1」「天空の黎明」が開催予定。

どうぞ、お楽しみに!

(K)

TOKYO Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13 「まさゆめ」



7月16日実施時の様子 目[mé]《まさゆめ》, 2019-2021, Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13 撮影：津島岳央

突如、東京の空に現れた“巨大な顔”

2021年7月16日の朝——突如、東京の空に巨大な顔が浮かんだ。告知は一切ナシ。多くの“謎”について直後からSNSで話題となり、ニュースでも取り上げられた。

実はこれ、現代アートチーム目[mé]による「まさゆめ」というプロジェクトで、東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京が主催するTokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13の1つ。大きな顔は写真で見ると合成を疑うかもしれないが、ビル6、7階ほどの高さの立体物だ。

さまざまな疑問を携えて、目[mé]のメンバーである南川憲二さん、荒神明香さんに話を聞いた。(取材日：2021年7月26日)



あれは何？ なぜあの顔？ なぜ東京？

巨大な顔を浮かべる——という着想は、荒神さんが中学生の時に見たという夢からきている。

「夢の中で電車に乗り車窓を眺めていたら、大きな光る顔がボンと浮かんでいたんです。驚くと同時に、それが人の手によって作られた顔だと気付いて。その顔の下で、たくさんの人たちが関わってその光景を作っていることに、中学生ながらすごく感動し、これは大事だから覚えておこうと思いました」(荒神さん)

3年前、Tokyo Tokyo FESTIVALに関するプロジェクトの公募を知り「まさに自分たちのための企画公募だ!」と応募。見事、勝ち取った。

「まさゆめ」と名付けられたこのプロジェクトは、実在するたった1人の顔を東京の空に浮上させるというもの。その顔は、プロジェクトの内容や応募規約に同意した人の中から選ばれ、最終的に目[mé]のアーティスト・荒神さんが決定する。

浮上に向けて、まず実施したのは「顔募集」。年齢、性別、国籍問わず、ウェブサイトを通して世界中から顔を募集した。都内各所で「顔募集」のためのワークショップも実施。その結果、1000人以上の顔が集まった。

さらにそこから“東京の空に浮かべる顔”を決める手がかりを探るため「顔会議」を開催、オンライン配信も行った。その会議の中で出てきた重要なキーワードが“はね返す顔”だ。

「人の顔って、あまりマジマジとは見ませんよね。でも、世界中の人から見られた時に、その視線をはね返せるような顔が、選ぶ基準としていいんじゃないか、と。最終10人くらいの候補者を、東京のいろいろな景色の中に合成してみた時に、風景に溶け込むわけでもなく、主張するわけでもなく、本当にピタッと収まる“はね返しの顔”は1人だけでした」(荒神さん)

確かに、何ともいえない存在感が……。ちなみに、属性を含む“誰なのか”という一切の情報は、プロジェクトの方針から全て非公開。見る人によって解釈が異なるのも、また面白い。1回目の実施は東京の代々木公園で行なわれたが、なぜ、あの場所だったのだろうか。

「今回コンセプトにしているのは『個』と『公』。最も世界中から注目される“パブリック”な状態の都市「東京」に、極めて“プライベート”な「実在する誰かの顔」を浮かべる。そんな作品の舞台として、入念にリサーチをした結果、抜けの視点や、引きの景色を持っていて、東京らしさを最も感じさせる場所の一つが代々木公園でした」(南川さん)



朝は高く浮上したが、夜は条件が整わずこまで。空高く上がるのは非常に困難だ
(7月16日)

今、これをするこの意味

この巨大な顔を見た時、真っ先に思ったのは「謎」ということ。頭の中に多くの「？」が浮かんできたが、それこそが“その先の思考へのきっかけに”という狙いだったようだ。

「謎って、理由とか答えが用意されていないので、人を主体的にさせるところがあると思うんです。夜、寝ている時に夢をみることに理由や理屈はないですよ。これ(まさゆめ)は人の夢なので、どこか理由を放棄してしまっているところがあります。

なぜ、私たちはこのコロナの状況に直面しなければいけなかったのか。一見、応えようのない問題かもしれませんが、それでも状況を主体的に捉え、想像することで、その『意義』は、後からでもつかむことができると思うんです。あらゆる合理性や理由、そういったものを一時的にでも解放できるような光景を皆でつくることができれば、この時代や状況にとっても大きな意味を持つように思います」(南川さん)

「きっといろいろな反応や、解釈が生まれると思います。自分たちが期待していないようなことも。でも、本質的な『謎』や『問い』というものは、私は人類の生存にとって欠かせないものだと思うので、諦めずにやりたいと思います」(荒神さん)

アートは特効薬ではなく漢方薬

コロナ禍による昨年の実施延期を経て、2021年7月、やっとこの「謎」の提示が実現した。今後も挑戦は続いていく。2人にプロジェクトの今後について聞いた。

「アートって特効薬じゃなく漢方薬と、よくいろいろな現場で教わりました。なぜ彼らはこれをしたのか、なぜ主催者である東京都やアーツカウンシル東京は事業として現代アートを選んだのか。これから自分たちがプロジェクトの意義にどう繋げていけるか、大事なところをゆっくり考えていきたいです」(南川さん)

「中学生の時、夢で見た顔に圧倒され、同時にそれをつくっている街や大人たちにすごく感動したということがあって、この夢を覚えていました。

今回、巨大な顔を見た誰かに『こういうことをやっていいんだ』『こんな謎のことを起こせる大人たちがいるんだ』ということが伝わって、それがもしかしたら勇気になるかもしれないし、何らかの可能性に繋がっていったらいいなと思います」(荒神さん)

このインタビューの後、7月とは異なる場所で、8月にも巨大な「誰かの顔」が東京の空に浮かんだ。

実施場所や日時について、事前に告知されなかったのは「作品との遭遇的な出会いから生まれる、主体的な体験を重視したい」という荒神さんたちアーティストの思いから。

夏の朝、突然、とてつもなく大きな「一人の他者」を目にした人の心には、どんな思いが浮かんだだろうか。(K)



目[mé]《まさゆめ》, 2019-2021, Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13
提供: まさゆめ事務局
※ 2021年8月9日浮上の様子。天候の影響により中断・順延しました。



目[mé]《まさゆめ》, 2019-2021, Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13
撮影: 小林空
※ 2021年8月9日浮上の様子。天候の影響により中断・順延しました。



目[mé]《まさゆめ》, 2019-2021, Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13
撮影：津島岳央
※ 2021年8月9日浮上の様子。天候の影響により中断・順延しました。



目[mé]《まさゆめ》, 2019-2021, Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13
撮影：津島岳央

REPORT

Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13 「ザ・コンスタント・ガーデナーズ (The Constant Gardeners)」



上野公園にアートインスタレーションが登場！

2021年7月28日、台風一過の東京・上野恩賜公園（通称：上野公園）竹の台広場で、大規模屋外ロボティックアートインスタレーション「ザ・コンスタント・ガーデナーズ」がスタートしました。

手掛けたのは、英国のアーティスト、ジェyson・ブルージュさん率いる「ジェyson・ブルージュ・スタジオ」。
2002年に設立され、アート、建築、テクノロジー、インタラクティブデザイン分野のパイオニアとして国際的に活動しています。

同スタジオの作品が日本で公開されるのは初めてのこと。日英交流年「UK in JAPAN」の主要プログラムの1つでもあり、ブリティッシュ・カウンシルの特別協力のもと、東京2020オリンピック・パラリンピックの開催期間と並行して9月5日まで展示されます。

ロボットアームが描く枯山水のような庭園

この作品は「産業用ロボットが、枯山水のような禅庭園をイメージした砂紋を描き出す」というもの。砂利が敷き詰められた長さ20mを超える石庭をキャンバスに、4台のロボットアームの庭師（ガーデナー）たちが、それぞれ同時に動きながら美しい砂紋を描いていきます。

1台1.3トンもあるロボットアームは、自動車工場での任務を終えた中古のものを再利用。白いアームとの対比が美しい濃いグレーの砂利は、14トンの玄武岩。その周りを額縁のように囲っているのは、シルバーグレーの4トンの花崗岩です。

これら全てをロンドンから運んできたそう。実はこれもコロナ禍の影響。全て日本のものでセットアップする予定が、渡航制限等のため英国で準備する必要があり、ヨークシャーの材料を使うことになったとのこと。そう説明すると、日本語で「ごめんなさい」と言いながら、両手を合わせたブルージュさん。

もし日本で準備できていたら、どこのどんな石を選んだのでしょうか。日英合作バージョンも見てみたかった気がします。

静寂の中に現れる躍動の軌跡

さて、この作品でロボットアームの庭師たちが描く模様は何だと思いませんか？

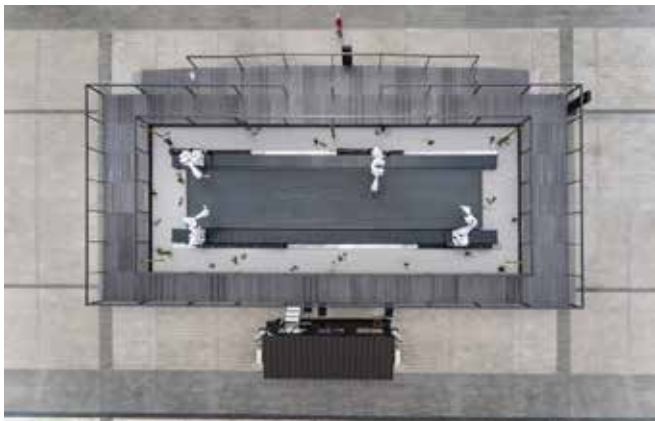
答えは——アスリートが生み出す体の動きをデータ化したもの。

ブルージュさんは「アスリートからインスピレーションを得て、ワクワクした」と言い、日本の伝統文化と、さまざまな競技のアスリートの動きを賞賛する思いが込められているとのこと。

その方法は、陸上や水泳など各競技のアスリートの動きをAIで分析し、動きに対する解釈を加え、同スタジオで開発したアルゴリズムによってプログラミングしていくというもの。時間の経過を表現したり、一瞬の動作を描いたり、違う角度から表したり、さまざまな描き方で、展示期間中は毎日新たな模様を描かれ、約150パターンの作品をつくりあげる予定です。

最先端のテクノロジー、アート、スポーツ、そして日本の伝統文化が融合する同展。枯山水とロボットという対極にありそうな2つにより創られる空間は、一見の価値あり！ 最後に、ブルージュさんからメッセージを——。

「来日を楽しみにしていました。ここのロケーションは本当に素晴らしい。美術館や動物園があり、文化的な場所です。噴水が近くにあるのも嬉しいですね。都心にも近いので、たくさんの人に、このアートワークを楽しんでほしいと思います。ぜひ、静寂の一瞬を感じてください」 (K)



©Jimmy Cahrssen courtesy of Jason Bruges Studio



©Jimmy Cahrssen courtesy of Jason Bruges Studio



©Jimmy Cahrssen courtesy of Jason Bruges Studio



©Jimmy Cahrssen courtesy of Jason Bruges Studio

REPORT

Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13 「世界無形文化遺産フォーラム ～歓び、祈り、大地、歌、踊り～」



“ 歓びや祈り ” という感情が “ 歌や踊り ” となった 五大陸六か国の民族芸能を紹介

8月1日(日)、ヒューリックホール東京にて「世界無形文化遺産フォーラム」が開催されました。本来ならば日本初披露となる芸能を含む五大陸六カ国の民族芸能を東京に招聘し、「世界無形文化遺産フェスティバル2020」として開催される予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により残念ながら招聘は中止に。

各国の芸能は映像による紹介となりましたが、それぞれに識者が登壇し、歴史的背景などの解説を交えながら、視覚・聴覚的にもインパクトのある特徴的な無形文化遺産が世界中に存在することを知ることとなりました。さらに特別ゲストを迎えてのトークセッションも行われた当日の内容を紹介します。

受け継がれてきたのは “ 踊り ” だけじゃない 生活の中で育まれた文化の美しさや力強さに感動

フォーラムは「東京の太鼓」により勢いよくスタート。まるで心の叫びのような太鼓の音と威勢のいい掛け声は、大江戸助六太鼓と東京都ろう者太鼓倶楽部鼓友会のみなさんによる実演。観客の気持ちをぐっと引き寄せ、フォーラムのメインである世界無形文化遺産(民族芸能)のレポートへ。

今回、紹介された民族芸能は、インドネシア共和国、エストニア共和国、エチオピア連邦民主共和国、トンガ王国、ブータン王国、ホンジュラス共和国のもので、ユネスコ無形文化遺産代表一覧表に記載されている芸能を中心に選考されました。



「エチオピアの民族芸能」を紹介している様子。
解説(右下)：招聘芸能選考委員会エチオピア現地調査団 左下は手話によるガイド
© 公益社団法人全日本郷土芸能協会

最初に紹介されたインドネシア共和国の「ガヨの伝統舞踊サマン」は、肩をくっつけて横一列に座った男性が体と頭を激しく揺らしながら歌うもの。こう説明してもなかなかイメージしにくいと思いますが、実際、映像が流れた瞬間、「え!」と小さく声が出てしまったくらい衝撃を受けました。個人的にはこの映像を見ただけでも「来てよかった」と思えるほどでしたが、「これもすごい」と感じる民族芸能がこれでもかこれでもかと紹介され、多種多様や、カラフルなどでは言い尽くせない濃厚さ。そのどれもが歌や踊りはもちろん、装束も独特で、長い時間をかけて受け継がれ、大切にされてきたものの持つ美しさをたたえており見応え十分。映像ではなく実演だったらどれほど心を揺さぶられたらだろうとつい想像してしまいました。



「ガヨの伝統舞踊」
インドネシア共和国
© 公益社団法人全日本郷土芸能協会



「セト・レーロ セトの多声歌唱」
エストニア共和国
© 公益社団法人全日本郷土芸能協会



「エチオピアの民族芸能」
エチオピア連邦民主共和国
© 公益社団法人全日本郷土芸能協会



「トンガの歌と踊り ラカラカ」
トンガ王国
© 公益社団法人全日本郷土芸能協会



「東ブータンのヤクの踊り」
ブータン王国
© 公益社団法人全日本郷土芸能協会



「ガリフナ民族の歌と踊り」
ホンジュラス共和国
© 公益社団法人全日本郷土芸能協会

「復興」「鎮魂」「感謝」 東北復興をテーマに紹介された三県の歌と踊り

日本からはオープニングの太鼓実演の他、東北復興の願いを込めて東北三県の歌と踊りを紹介。これらも本来ならば実演披露の予定でしたが、残念ながら中止に。

映像により紹介されたのは、岩手県大船渡市の「仰山流笹崎鹿踊」、宮城県仙台市の「秋保の田植踊」、福島県いわき市の「じゃんがら念仏踊り」。どの映像もこの日のために作成されたもので、田植踊を披露した女子高校生の「田植踊は人生そのもの、とても大切」という言葉や、「仰山流笹崎鹿踊」のみなさんの「共にコロナ禍を乗り越えましょう」というメッセージは真っ直ぐに届き、また「じゃんがら念仏踊り」の高校生たちの「東日本大震災で亡くなった友人を弔うために再結成した」というエピソードは胸に響きました。



オープニングに登場した「東京の太鼓」
大江戸助六太鼓、東京ろう者和太鼓倶楽部鼓友会 / 東京都 © 公益社団法人全日本郷土芸能協会



振袖姿が美しい「秋保の田植踊」
湯元の田植踊保存会／宮城県仙台市
© 公益社団法人全日本郷土芸能協会



串の思いを込めた「じゃんがら念仏踊り」
福島県立小名浜海星高等学校
チーム「じゃんがら」／福島県いわき市
© 公益社団法人全日本郷土芸能協会



シカの角をつけた鹿頭が特徴的な「仰山流笹崎鹿踊」
仰山流笹崎鹿踊保存会／岩手県大船渡市
© 公益社団法人全日本郷土芸能協会

芸能と伝統芸、旅、祭り、各ジャンルから ゲストを迎えてのトークセッション

最後のトークセッションは、ゲストにアーティストのデーモン閣下氏、リポーター・ミステリーハンターの竹内海南江氏、ライターの大石始氏を迎え、モデレーターとして東京文化財研究所の久保田裕道氏が登場。

感想を求められ、大石氏が「とにかくどれもカッコいい。きっと子どもの頃から身近に（民族芸能を）見て、自分もやりたいという思いによって受け継がれていったのだろうと再認識した」、竹内氏は「濃いものをいっぺんに見て、知って、頭の中がごちゃごちゃだけれど、全ての共通点は人間が行なっていること。美学を感じた」と話すと、久保田氏が「とてもうれしい感想」と笑顔に。さらにデーモン閣下氏は「世界各国の芸能をランダムに一気に見たけれど、この全てが集まって実演したらどうなっていたんだろう。村から出たことのない民族を招く予定もあったそうだし、それこそセッションしたらずいことが起こりそう」など、話はいろいろな方向へ。

識者への質問を通したやりとりでは「民族芸能の根底には、どれも祖霊信仰があると思う」や「こういう芸能はその時代時代の都合に合わせてしつらえられているのかも、たとえばコロナ禍であれば疫病退散とか……」などの意見も聞かれ、大いに納得。終盤には「ぜひ今回限りではなく2回、3回と続けて開催して欲しい」とゲストからのリクエストも。興味を喚起させるフォーラムとなりました。(H)

ゲスト



和の伝統芸にも精通
デーモン閣下（アーティスト）



訪れた国は105カ国
竹内海南江（リポーター・ミステリーハンター）



世界各地の民族音楽や祭り文化を取材
大石始（ライター）

モデレーター



「無形文化遺産にはさまざまなジャンルがありますが、今回は歌と踊りに絞って紹介しました。」
久保田裕道（東京文化財研究所無形文化遺産部無形民俗文化財研究室長）



トークセッションの様子